5．まとめ

本稿では、出土土器の編年的研究、搬入土器、赤色顔料付着土器の分析をおこなった。

出土土器では、松山平野に出土例が少ない後期前葉（梅木編年Ｉ）の良好な資料が得られ、今回提示できたことは後期土器の編年研究に大きな影響を与えるものである。その一方、弥生末の土器の整理と分析は充分ではなく、今後に課題を残すものとなった。

搬入土器では、今日まで対岸でありながら安芸地方との関係は不透明であったが、今回の資料により少なからず交流の事実が明らかになった。地域間交流や交易を考える上でひとつの資料となるものであり、資料価値は高いと考える。なお本稿では、胎土と色調を重視した搬入品の同定作業を基本とした。よって、出土物中には形態や施文において在地にない形状をもつものもあったが、胎土と色調は在地品と区別できなかったため本稿で取り上げなかったものが幾つかある。整理調査中に各地の研究者に実見していただき、助言を賜ったが、胎土については安芸と伊予では、混和剤中に特徴的な鉱物が入ることがない（鉱物が異ならない）ため、地域を特定するには難しい条件があることを確認することになった。

赤色顔料付着土器では、器種と赤色顔料の使用形態に一つの関係が求められるにいたった。特に外来系土器にベンガラが、在地系土器に朱が検出されたことは特筆すべきことであり、今後の資料により、その是非を明らかにしなければならない。松山平野における顔料使用の形態は、九州地方とは異なり、瀬戸内以東の地域と傾向を同じくすることになれば、赤色顔料からみる文化圏の設定も可能であろう。

最後に本稿を成すにあたり、外来系土器については伊藤実氏、平井典子氏、大久保徹也氏に多くの助言をいただいた。また、本田光子氏には赤色顔料の使用形態について御教示いただいた。本稿にて充分に生かせなかったことをお詫びするとともに、末尾となったが感謝の意を表するものである。

〔文　献〕

梅木謙一　1991「松山平野の弥生後期土器」『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

梅木謙一　1995「伊予の赤色顔料」『月刊考古学ジャーナルNo.394』

Ⅴ-2　道後城北遺跡群の古墳時代集落の変遷

宮内　慎一

1．はじめに

道後城北地区は松山平野の北部、松山城（勝山）の北に広がる平野部と丘陵部から構成されている。これまでの調査・研究により、道後城北地区は弥生時代の松山平野における拠点的な集落地帯であったことが明らかになっている。同地区内からは平形銅剣や青銅鏡などが出土しているほか、集落関連遺構が多数検出されている。

その反面、古墳時代以降の集落経営や構造などは不明な点が多い。そこで、本論では道後城北地区における古墳時代の集落構造解明を目的として、集落変遷について考察するものである。論に際しては、竪穴式住居址に着目し分析をおこなう。

2．時期区分と地区割り

本論では、古墳時代を大きく5つの時期に区分する。Ⅰ期：古墳時代前期、Ⅱ期：古墳時代中期前半、Ⅲ期：古墳時代中期後半、Ⅳ期：古墳時代後期前半、Ⅴ期：古墳時代後期後半以降である〔Ⅰ期は4世紀、Ⅱ期は5世紀前半（須恵器出現以前）、Ⅲ期は5世紀後半、Ⅳ期は6世紀前半、Ⅴ期は6世紀後半以後〕。また地区割りは、谷若倫郎氏（愛媛県埋蔵文化財調査センター）による城北地区、道後地区、祝谷地区の3区分を用いる。以下、各地区の主要な古墳時代の遺跡を略記する。

城北地区―文京遺跡・松山大学構内遺跡・松山北高遺跡・若草町遺跡

道後地区―道後今市遺跡・道後姫塚遺跡

祝谷地区―祝谷アイリ遺跡・祝谷古墳群・桜谷古墳群

3．竪穴式住居址の立地と形態

Ⅰ期：古墳時代前期

城北地区では松山大学構内遺跡2次調査・3次調査・松山北高遺跡（2次）及び若草町遺跡において当該期の竪穴式住居址が確認されている。平面形態はいずれも隅丸方形を呈する。規模は、一辺4～5mを測る。若草町遺跡を除く3遺跡では、主柱穴は4本、楕円形の炉は住居址中央部にある。道後地区・祝谷地区では当該期の住居址は未検出である。

Ⅱ期：古墳時代中期前半

当該期の竪穴式住居址は城北地区と道後地区で検出されている。城北地区では松山大学構内遺跡2次調査ＳＢ1、同3次調査ＳＢ10がある。平面形態は方形を呈し、一辺約5～6mを測る。主柱穴は4本である。ＳＢ1は住居址北東隅にカマドを付設している。道後地区では道後今市

遺跡6次調査において当該期と考えられる住居址を検出したが、遺存状況が良好でなく平面形態や規模は定かではない。

Ⅲ期：古墳時代中期後半

城北地区では松山大学構内遺跡3次調査において、6例が確認されている。また、道後地区では、道後今市遺跡3次調査と、丘陵部の道後姫塚遺跡において各1例が確認されている。平面形態はほとんどが方形を呈する（遺存状況の良好でないものは除く）。規模は一辺5～6mのものが大半を占めるが、道後今市遺跡3次調査ＳＢ1は一辺6～7mを測り、やや大型である。主柱穴は4本を検出している。道後姫塚遺跡ＳＢ1は住居址埋土上層にて弥生土器と須恵器が混在して出土しているため、確実な時期比定は難しいが、本論では出土した完形の須恵器の特徴などから当該期の住居址と判断している。

Ⅳ期：古墳時代後期前半

当該期の竪穴式住居址は松山大学構内遺跡3次調査において3例が確認されている。ＳＢ23は1辺6～7mを測るやや大型の方形住居址である。他の住居址については切り合い等により詳細は不明である。

このほか、祝谷地区では丘陵部の祝谷アイリ遺跡において当該期の住居址が確認されている。平面形態は方形プランを呈するものと思われ、規模は一辺5m前後を測る。両住居址はカマドを付設する。

Ⅴ期：古墳時代後期後半

城北地区では、松山大学構内遺跡2次調査・3次調査において、多数の住居址が確認されている。一方他の地区では少なく、道後地区の道後今市遺跡4次調査ＳＩ02の1例にかぎられる。松山大学構内遺跡3次調査では7例が検出されており、平面形態は方形と長方形の2者が存在する。方形のものは一辺5～6mのものと7mを越えるものとがある。同2次調査を含め、長方形の住居址は長辺5m前後、短辺3～4m前後のものである。2次調査ＳＢ5・ＳＢ9は馬蹄形状のカマドを付設している。

4．小　結

本論では道後城北地区の古墳時代における住居構造や推移を整理した。

集落の立地については、Ⅰ期では道後城北地区に竪穴式住居址5例が確認されている。Ⅱ期になると松山大学構内において前期に引き続き2例が確認されているほか、新たに道後地区の道後今市遺跡6次調査で1例が確認されている。Ⅰ・Ⅱ期では点在した住居址が、Ⅲ期になると松山大学構内に分布が集中する。Ⅳ期では松山大学構内のほか、祝谷丘陵部に2例が確認されている。Ⅴ期には、松山大学構内で再び検出例が増加する。そのほかには道後地区にわずかではあるが当該期の住居址が確認されている。

これらのことから、城北地区と道後地区の平野部では集落経営は継続的に行われていたも

表12　道後城北地区の竪穴式住居址(古墳時代)一覧

番号	遺　跡　名	遺構名	時代					平面形	規　模 長軸×短軸(m)	主柱穴 (本)	炉	カマド
			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ					
A	松山大学3次	SB3	○					隅丸方形	4.1×3.5	4		
		SB10		○				方形	5.6×5.1	(4)	○	
		SB16				○		方形	5.1×(4.0)			
		SB20				○		方形	(3.4)×(3.0)			
		SB23				○		長方形	7.0×6.0			
		SB6					○	長方形	7.6×6.1			
		SB11					○	長方形	5.6×4.6	(4)		○
		SB14					○	方形?	5.5×(1.3)			
		SB19					○	方形?	4.2×4.2			
		SB21					○	方形～長方形?	(3.5)×(3.0)			
		SB24					○	方形	5.8×5.5			
		SB25					○	方形	7.8×7.3			
B	松山大学2次	SB10	○					隅丸方形	3.2×3.2		○	
		SB1		○				方形	5.7×5.3	4	○	○
		SB6			○			方形	5.0×4.5	4		
		SB11			○			方形～長方形	4.5×(2.0)			
		SB12			○			長方形	6.1×5.4			
		SB13			○			方形～長方形	(2.3)×(2.0)			
		SB14			○			方形～長方形	(3.7)×2.9			
		SB15			○			方形	5.1×4.9	4		
		SB5					○	長方形	4.2×3.6			○
		SB8					○	長方形	3.7×(3.1)			
		SB9					○	長方形	4.9×3.3			○
C	松山北高2次	SB6	○					隅丸方形	4.6×4.1	4	○	
D	道後今市3次	SB1			○			隅丸方形	6.7×5.8	4		
E	道後今市4次	SI02					○	長方形	4.8×4.4	(4)		
F	道後今市6次	SB1		○				隅丸方形	(2.4)×(1.8)	(4)		
G	道後姫塚	SB1			○			長方形	6.0×(4.2)	4		
H	祝谷アイリ	SB1				○		方形	5.1×(2.0)			○
		SB3				○		方形	5.3×(5.0)			○
I	若草町	SB2	○					方形	4.8×4.6			
		SB3	○					方形	4.8×4.7			

のと考えられる。しかも古墳時代中期後半以降は特に松山大学構内を中心とする地域に集落が集中して営まれていた傾向がみられる。一方、丘陵部では古墳時代を通してわずかに集落は営まれていたものと考えられるが、住居数は後期後半以降は減少傾向にあると考える。

竪穴式住居址の平面形態は、古墳時代を通じ方形プランが主体をなすものと考えられる。後期になると一部に長方形プランのものが出現する。

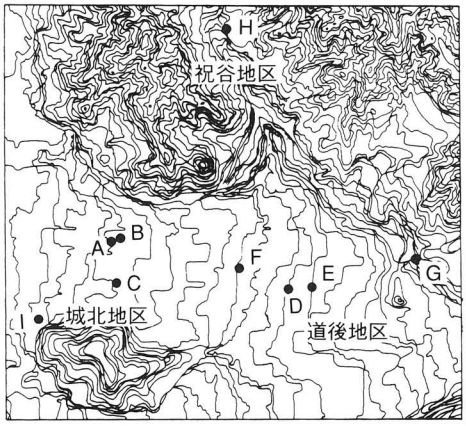
規模では方形プランのものは、Ⅰ期は一辺4m前後、Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期は一辺5～6m前後、Ⅴ期は一辺5～6m前後のものと一辺7mをこえるものである。方形プランのものは規模が拡大する傾向にある。ただし、一辺7mをこえる住居址は数棟しか検出されておらず、住居の評価が課題である。

内部施設では、古墳時代の住居址の主柱穴は4本柱と考えられる。後期以降の住居址については主柱穴は未検出のものが多く、柱構造が課題である。カマドは古墳時代中期前半に比定される住居址に出現する。ただし、中期前半以前の検出例が少なく、初現は現在のところ定かではない。

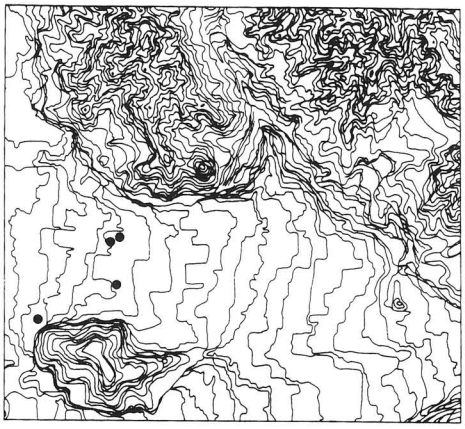
以上、竪穴式住居址に着目し、古墳時代の集落の立地や変遷を追求したが、概観するにとどまった。確実に時期比定できる住居址が少なく、今回掲載した資料以外にも、古墳時代の遺物が出土した住居址は多数報告されている。今後は道後城北地区の各地区（城北・道後・祝谷）の詳細な変遷を明らかにするとともに、弥生時代から古墳時代へ移行する時期の竪穴式住居址の変遷や、カマドの出現期の特定など、道後城北地区内の集落論の充実をつとめなければならないであろう。

〔参考文献〕

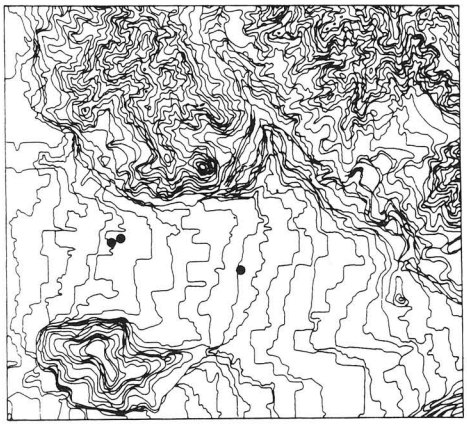
梅木謙一　1991　『松山大学構内遺跡―第２次調査―』松山市教育委員会
梅木謙一　1992　『道後今市遺跡６次調査』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
梅木謙一　1992　『祝谷アイリ遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
阪本安光　1979　『道後姫塚遺跡』愛媛教育委員会
阪本安光　1981　『愛媛県立松山北高等学校遺跡』愛媛教育委員会
岡田敏彦　1985　『道後今市遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
相原浩二　1991　『若草町遺跡』「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ」松山市教育委員会
宮本一夫　1991　「文京遺跡の地形復元」『文京遺跡８・９・11次調査』
愛媛大学法文学部考古学研究室、愛媛大学埋蔵文化財調査室



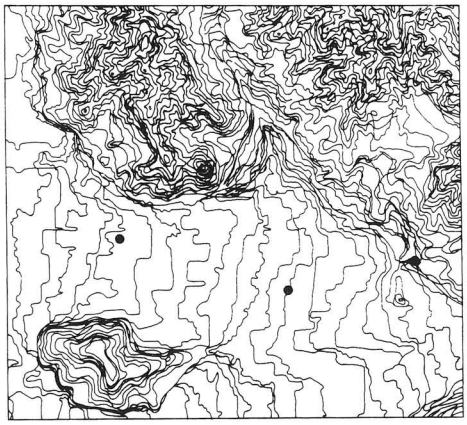
遺跡の分布状況と地区割り



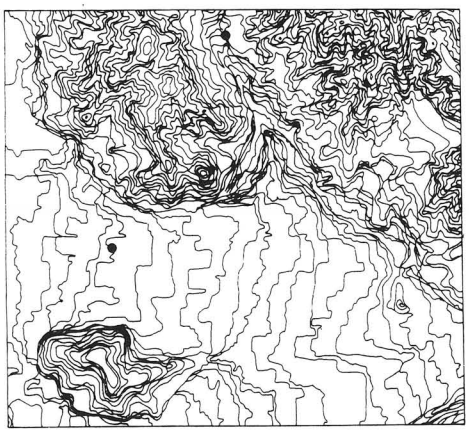
Ⅰ期



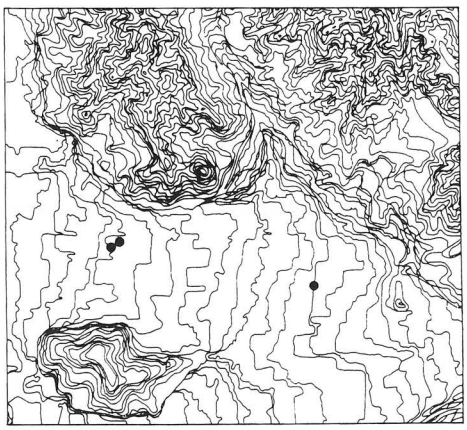
Ⅱ期



Ⅲ期



Ⅳ期



Ⅴ期

第307図　道後城北地区の遺跡分布図

Ⅵ　松山大学構内遺跡３次調査の成果と課題

松山大学構内遺跡３次調査は道後城北地区の弥生時代から古墳時代の集落構造解明を主目的として実施した。調査・研究の結果、⑴　道後城北地区の集落様相と評価、⑵　松山平野の弥生後期土器の様相を追求するものになった。

⑴　道後城北地区では、集落の定着は縄文時代後期から弥生時代前期の間と考えられている。弥生時代から古墳時代にかけては、平野部を主に集落が経営され、集落範囲は時代が下るにつれ、東から西へ拡大していくといった集落変遷が明らかになっている。

松山大学構内遺跡では、２次調査において、弥生時代から古墳時代の竪穴式住居址16棟が検出されているが、本調査においても弥生時代後期後半～末、古墳時代、特に古墳時代後期の住居址が多数検出された。道後地区における集落構造を分析する資料を補充するものとなった。

一方、祝谷地区や道後地区は、集落の構造は未知の部分が多く、道後城北遺跡群全体としては集落構造の検討は継続していかなければならないであろう。

本調査では弥生時代の遺構や遺物が比較的良好な状況で検出することができた。弥生時代に時期比定できるものは竪穴式住居址8棟、流路3条、溝1条ほかである。まず、中期後半にＳＲ1が調査地に出現し、後期前葉には埋没する。後期後葉にはＳＢ2が調査地南端に出現し、後期末の前半には溝ＳＤ401・402が出現する。そして時期を隔てることなくＳＲ2が調査地中央部を流れることになる。また、同時期にはＳＢ1・8・9が出現する。後期末の後半には、ＳＲ3が出現する。ＳＲ3と同時期にはＳＢ12・15・17が流路の南側に出現するのである。

弥生時代で特筆される遺物には、ＳＢ17出土の石杵があげられる。石杵には赤色顔料が付着している。また、ＳＸ3出土の土器の中には赤色顔料が付着するものが数点ある。ＳＢ17出土の石杵とＳＸ3出土の土器には関係があるものと考えると、ＳＢ17は赤色顔料製作の作業場か、もしくは、祭祀をつかさどる場として利用されたのではないかと推測するものである。

古墳時代では、多数の住居址や土坑が検出された。住居址は、前期と中期には調査地南半部に数棟あるが、後期には調査地全域に分布が拡大する。さらに後期後半では大型の竪穴式住居址と掘立柱建物址が調査区北半部を中心に分布する。8世紀には多数の溝や土坑があり、調査地が居住以外に利用されていたことがうかがわれる。

これらのことから、本調査地では弥生時代、古墳時代、古代（7・8世紀）を通して、継続的に集落が営まれていたものと考えられる。とりわけ、弥生時代後期は、赤色顔料や分銅形土製品、ガラス玉などが出土していることから、集落経営は充実していたものと考えられる。

⑵　流路出土の遺物は、松山平野の中期後半から後期の土器の編年的研究において基礎的資料となるものである。梅木編年の中期Ⅲ、後期Ⅰ、後期Ⅲの遺物が主に出土している。

器種構成では甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器は各時期に存在する。器台形土器や支脚形土器は中期後葉には出土がなく後期になり少量存在する。複合口縁壺はＳＲ１（後期前葉）には出土がなく、出現期を考えられるひとつの資料であろう。

また、高坏形土器については、これまで中期後葉から後期前葉の変化が明らかでなかったが、その一部が知られるようになった。つまり、坏部の口縁形態が、中期は内傾もしくは内湾するものがほとんどを占めているのに対し、後期前葉には直立～外傾するものが出現することで、その違いが認められるのである。小型品については、施文において選別が可能になった。

そのほか、搬入品と外来的要素をもつ土器がＳＲ1～3や包含層などから多数出土している。中期後葉では吉備や讃岐周辺の土器が、後期前葉では東～中部瀬戸内地方や東九州地方、後期末では東・中部瀬戸内地方と畿内的要素をもつものがある。

このことは、弥生時代における松山平野と他地域との交流の一端を明らかとするものである。今後は、平野出土の搬入品や外来的要素の強い遺物の分析を進め、土器からみた道後城北地区、さらには松山平野の歴史的な役割や位置付けについて考えていかなければならない。

以上、松山大学構内遺跡３次調査より、弥生時代から古墳時代の道後城北地区の動態を考察した。さらには、松山平野の遺構・遺物の資料収集と考察を行い、弥生時代から古墳時代の社会・文化の様相を追求した。

今後は、松山平野と他地域との関連をさらに追求し、各時代における西日本の中の松山平野の歴史的位置付けや評価を追求しなければならないであろう。

〔参考文献〕

谷若倫郎　1988　『道後城北遺跡の展開』古代学協会四国支部シンポジウム資料

梅木謙一　1991　『松山大学構内遺跡―第２次調査』松山市教育委員会

報告書抄録

ふ り が な	まつやまだいがくこうないいせき
書　　名	松山大学構内遺跡II
副 書 名	松山市道後城北遺跡群
巻　　次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第49集
編 著 者 名	宮内慎一・梅木謙一・加島次郎
編 集 機 関	財団法人　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒791　松山市南斎院町乙67番地6　　Tel 089—923—6363
発行年月日	西暦　1995年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
まつやまだいがく 松山大学 こうないいせき 構内遺跡 第3次調査	まつやましぶんきょうまち 松山市文京町	38201		33° 50′ 51″	132° 46′ 08″	19921102～ 19930515	1,600	厚生会館 建　設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松山大学構内遺跡	集落	弥生	竪穴式住居址、溝、自然流路	弥生土器、石器 赤色顔料、石杵 青銅鏃	弥生時代後期から古墳時代後期の集落
		古墳	竪穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝	土師器、須恵器、鉄器、ガラス玉	弥生時代中期後半から後期末の自然流路
		古代	土坑、溝	土師器、瓦器	

松山市文化財調査報告書　第49集

松山大学構内遺跡II　—本文編—

平成7年3月31日　発行

編　集　松山市教育委員会

発　行　〒790 松山市二番町4丁目7—2
TEL (089) 948—6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923—6363

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790 松山市湊町7丁目1—8
TEL (089) 941—9111